# 日野市の現状と課題の整理　生物多様性基礎調査から得られた課題について

※生息環境区分の「緑の少ない住宅地」と「開放水面」は現地調査をしていないため、図中に示していない

資料 4

## 崖線斜面

## 多摩丘陵

## 台地

## 沖積低地

## 河川

**生息環境区分 1　斜面・常緑樹林**

①百草八幡神社の社叢林

**・希少な樹林の保全**

スダジイの巨木を中心とする発達した樹林環境は日野市内にごくわずかに残るのみで、周辺には住宅地がせまり、樹林環境が断片化・孤立化している。発達した樹林環境は日野市に残る貴重な環境であるため、適切に保全する必要がある。

**・民有緑地の積極的な活用**

「百草のシイノキ群」など、自然に近いみどりを保全するためには、民有緑地の公有地化や管理協定、トラストの積極的な活用など行政と市民相互の連携・協力が求められる。

**生息環境区分 2　斜面・丘陵の落葉樹林**

②都立七生公園付近　⑩黒川清流公園

**・二次的自然環境の減少・劣化**

丘陵地の生きものの多様性を保つには、継続的に人の手を入れることで雑木林や草地など二次的な植生を維持することが必要である。

**・宅地化や相続によるみどりの減少**

丘陵や崖線の樹林は日野市に残された重要なみどりである。この環境を次世代に残すためには、宅地化や相続によるみどりの減少を防ぐ必要がある。

**生息環境区分に基づかない調査地点**

⑧潤徳小学校ビオトープと向島親水路

**・用水の維持管理の担い手**

稲作の衰退と共に、用水を維持管理する主体が代わってきている。近隣住民を中心とした用水守制度が活用され、ボランティアによる維持管理が行われているが、日ごろ用水と関わりの無い市民も用水との結びつきを強め、市民全体で用水を守る体制が望まれる。

**・環境用水の将来的な利用**

農業としての用途が失われた用水は環境用水として利用されているが、安全面や衛生面での課題も残っている。環境用水としての利用価値を高めるなど、将来的に用水を利用する方法を考える必要がある。

**生息環境区分 3　低水敷の落葉樹林**

③多摩川河川敷の樹林

**・河川敷の樹林化**

河川敷に点在する樹木に外来種のハリエンジュがある。ハリエンジュは拡散することで、在来の植物に悪影響を及ぼす恐れがある。生態系を保全するためには防除を行う必要がある。

**・礫河原の劣化**

樹林や乾性草地の拡大によって、礫河原とそこに特徴的に生育・生息する生きものが減少していくおそれがある。特に、シナダレスズメガヤの生育量が増えると、冠水時に砂が堆積し、礫河原が砂の多い河原へ改変される可能性がある。

**生息環境区分 4　果樹園・緑の多い住宅地**

④多摩平の森の団地植栽

**・単調な緑地管理の改善**

芝生をはじめとする草地は一様に低く刈り取られることで、植栽環境が単純になっており、生育・生息する生きものが少ない。生きものへ配慮する観点からは、画一的な管理ではなく、そこに生息する生きものの生態に合わせた緑地管理が必要である。

**・民有地の緑の保全**

巨樹・巨木、屋敷林、樫ぐね、社寺林等は民有地における歴史的価値のあるみどりであり、市民とともに保全や活用の方策について検討することが望まれる。

**生息環境区分に基づかない調査地点**

⑨真堂が谷戸

**・重要種の保全**

豊かな自然環境の残る真堂が谷戸では、調査で多くの重要種が確認された。これらの種が今後も健全にこの場所で生育するためには、種ごとの適切な管理と保全計画が必要である。

**・湧水の水量確保**

湧水の水量は、季節や降水量によって変化するが、かん養域の宅地化や土地利用の変化により減少し、枯渇することが考えられるため、長期的に推移を見ながら湧水の保全を計る必要がある。

**生息環境区分 6　畑・草地**

⑤東光寺上地区の畑

**・農地の減少・断片化**

農業は産業の場であるだけではなく、古くから親しまれてきた日野市の風景を形成し、動植物の生息・生育空間でもある。生産の場としてだけでなく、多面的な利活用によって、農地減少をくい止めることが望まれる。

**・農業者の高齢化や後継者不足**

相続の発生や農業従事者の高齢化を背景に農地は減少を続けている。農地保全の取組み、農業に従事する人材の育成により、農と共存するまちの形成が望まれる。

**生息環境区分 7　水田・低水敷草地**

⑥多摩川河川敷の高茎草地　⑦新井の田んぼ

**・外来植物の繁茂**

多摩川河川敷では多くの外来植物の繁茂が確認された。特定外来種をはじめ、シナダレスズメガヤの繁茂など河川生態系に悪影響を及ぼすことが懸念される事象があり、早急な対策が求められている。

**・水田の減少**

昭和 60 年に 108ha あった水田は、現在では 20ha 未満となっている。水田の減少によって、水田を生息環境とする種の減少が懸念される。防災、環境、食育など、農地の多面的機能の再認識と合わせて減少を防ぐ必要があります。